

SPA!

Business, Culture and Entertainment Weekly.

10/25 週刊SPA! 1995
300円

夕刻のコペルニクス●鈴木邦男

「殺したい人間がいたら、すぐに殺します」
赤報隊の申し出に、僕は殺人プランを立てた!

超低予算対策から出てきた
業界別「苦肉のアイデア」
傑作集

在日イラン人の素顔と本音

仕事・メシ・宗教・遊びから性欲の処理まで



藤井尚之

女性総合職が見た
「サラリーマンの
哀しい掟」

中森文化新聞

神田うの
女性週刊誌を
笑う!

今週の顔

宮澤寿梨
田中光

ニュースな女たち

江角マキコ

ネコにハマった都市生活者たち

マンションの「隠れ飼い主」の急増、写真集など「ネコビジネス」のブームetc.

越境科学者探検隊

第3回

 岐阜大学教育学部助教授
 縞縞学者 川上紳一

科学にとっていちばん下らぬものは、高い敷居とつまらぬ縄張り。大切なのは神をも恐れぬ横断だ。横断によってさらけだされる縞縞構造。今、もっとも深邃な研究は、そんなわかりやすすぎる世界から始まる予感だ！

科

学を信じられない、物理

学を信じられない、化学を信じられない、この世を読解し尽くすのに実は科学など無力なんじゃないか、天才の世界に逃げ込みたい、東洋思想の中にこそ答えがある……。ある一時期、科学者たちは悩みに悩んだ。研究にいそしんでも、自分たちのオリジナリティは生かせない、そこにあるのは悲しいことに上から押しつけられた権威には溢れているけれど、ちっとも面白味もなければ発展性もない、科学という名だけつけた、ルーティンワークを積み重ねた残骸のような学問にしかすぎない。

だからできることなら夢を見させてくれる教団がいいよな、それよりも、夢を実現してくれるお金持ち、いわくありげな団体がいいな、例えば企業の研究所なんでもしかすると最高じゃないかな。

いろいろ考えて気の早い学者、学者の卵はそれぞれに棲み分けを行った。ニュー・サイエンスなんて言葉で、少々いきがってみせる人々もいた。でも、ヨイカやタオは体には良かったかもしれないが、肝心の「答え」はまるで与えてくれない。宗教団体も企業の研究所も、結局は入

れ物にすぎない。何を入れるか？ 何を研究するか？

科学に対して疑いや、疑問を持つこと自体は、当然のことだ。宗教や哲学も含めて、人間の作り出したものは未だに完璧ではない。ジャンル分けして細分化することで様々な研究が進んだわけだが、細分化しすぎて停滞が起き、真理への道ではなく、研究のための専門家であり続けるための研究の迷路にはまりこんでしまふ、そんな状態を自ら意識して、つまらぬ障壁を破壊する行動を起こすこと。それが行き詰まりを打開する大きな一歩になる。

縞縞学というびつくりしちゃう名前の学問がある。自然の中のあらゆる縞縞構造（例えば地層）を、縦横にはりめぐらされたネットワークで、四方八方から研究して分析し、ついには全地球史読解という壮大なプランを実行してしまおう、という大胆な学問。研究対象が縞縞なら、研究する側も縞縞なわけだ。

リズムから地球の歴史を読み解く縞縞学

この研究ネットワークの中心人物の1人、川上紳一氏は、長野県に生まれて名古屋大学で地

球物理を学んだ理学博士、現在は岐阜大学助教授である。長い時間をかけて縞縞に堆積した湖成堆積物珪化木の年輪、あるいは縞縞に存在するもの、例えば気候変動、潮の満ち干き、シマウマの縞など、全てを研究の対象にし、そして地球の歴史に迫る。

縞縞とはリズムであり、縞縞学はつまりリズムから地球の、果ては宇宙のあらゆる事柄を読み解いていこうとするダイナミックな学問的律動なのである。

当然、派閥意識、縄張り意識などは全くない。自分の長年の研究成果や、採集してきた標本なども、当然のようにひよいと差し出し、ネットワーク全体での研究の進歩に向けての材料とする。知識がない、その学問の言語がわからない、なんて泣き言は言ってはいられないから、地球物理が専攻でも、非線形力学や古生物学や古文書読解や何やらかにやら理解しなくてはならない。専門バカにはどういてきかない研究なのである。

川上氏は実に快活に、元気に、確信を持って、自分たちの研究について語る。あの自信のない、そして方法を持たない、現実と対応することのできない、夢破

川上紳一、趣味は縞縞。ただし横縞よりは正義を好む。知性は彼をどこまでも運ぶのだ！



縦横にめぐらされたネットワークから地球史を読み解く、それが縞縞学だ

れた科学者とは対照的だ。人類の、地球の、宇宙の起源を、そのリズムの仕組みを、システムを読解しようというプランが、文部省が研究補助金を出す重点領域研究として平成7年度から

認められたのだから、その元氣さも当然かもしれない。では彼らの研究は現在どういった地点に立ち至って、何をどう説明できるようになっていくのか？ 以下は次号のお楽しみである。